

# 藝園牧草叢



夕張郡長沼町字幌内一〇六六

雪印種苗株式会社

中央研究農場

雪印種苗株式会社

# 飼料作物の栽培について

香川県善通寺市牛野町

四国農業試験場飼料作物研究室

## 西 村 修 一

### 四 飼料作物の作り方にについて

日本の今までの農業は、大抵作物の実や種子、すなわち穀物をとることを目的とした農業ですが、青刈りの草をとることを目的とする飼料作物は、このやりかたと少し考えたを変えて作らなければなりません。この点について特に注意しなければならないことを二つ三つ述べましょう。

まず、種子は自分でとった新しいものなら素生がわかつていますが、買入れるときには、信用のある種子屋で買つて、前もつて芽が出るかどうか、たしかめておくのが良いでしよう。そのためには、土の上に播いてみるとよいが、簡単には、皿に吸収紙か脱脂綿をしたものをお水で湿らせて、その上に種子を並べて、部屋の中において芽のできる様子を調べてもよろしい。こうして、種子の何割ほどが芽を出すか、すなわち、発芽率(発芽歩合)があまり悪ければ、種子の播き量を歩増しして、生えない分を補つてやらなければなりません。種子の良し悪しを目でみわけることは、なかなか難しいことで、特に品種の良し悪

しそうなことは、突入りがよくて鐵がなく、艶があつて、まじりものの少い種子を選ぶのがよろしいでしよう。

子には、石だね又は硬實といつて、播いてもすぐに芽を出さない種子があります。これは種子の中味には故障はなく、生きているのですが、皮が硬くて水を通さないもので、二十三年のうちに、そのままほつておいても芽を出します。しかし、田畠へ作るときはすぐ生え揃う方が便利です。直ぐに芽を出すようにするには、種子の皮に傷をつけて水を通してすればよいので、そのためには、前もつて種子に乾いた砂を混ぜて、一〇分間ほど木のうすで軽くつくとか、布袋に入れてもんだりすればよろしい。タンジジャピーような大粒の種子ならコンクリートの床へ手でこすりつけるようなことをすればよいのです。昔の作物でも、大豆やコンモンベーチには石だねはありません。

昔の作物の種子の寿命は一般に長くて、種子の良し悪しを目でみわけることは、なかなか難しいことで、特に品種の良し悪

てから一・二年ごしの種子でも、もう生えのわるくなるものが多いものです。すなわち、麦類特にライ麦とかスードングラス・レッドトープなどは特に寿命の短い種類です。また、このような古だねは、たとえ芽を出しても、その勢が弱くなっていますから、その後の生長が悪いことが多く、従つて収量が上りません。

さて、このように前もつて準備した種子を播きつけるわけですが、播きかたには、ばら播き、すじ播き、点播きの区別があります。ばら播きにします

と、田畠全面をうずめて播き幅九立以上一・三立の種子を、播き幅一六・二〇糸幅にせまくすじ播きするのが普通ですが、

青刈り燕麦の場合には、反当り九立以上一・四立・七・二立の種子を、一〇糸幅などの幅にせまくすじ播きします。一例をあげますと、実取りの麦なら六〇糸幅に反当り九立以上一・四立・七・二立の種子を、一〇糸幅の

### 表紙写真の説明

放牧…早春のライ麦畠…雪印上野観音寺

### 牧草と園芸

三月号 目次

#### ◇飼料作物の栽培について (1)

中野富雄：四

#### ◇西南暖地の飼料作物見聞記

(岡山県の巻)

#### ◇不適地に向くバーベット・フレホイル

アメリカにおける利用状況について 鈴木俊人：九

#### ◇草でも豚が飼える

ラデノクロバ利用による養豚の一例 生田正美：二

#### ◇果樹栽培と関係の深い土性について

田村勉：四

#### ◇花芽の分化・発育を中心とした果菜類の育苗

(1) 八鋤利郎：七

以上にひらく播きます。

そこで、田畠へ作つて充分手入れ、即ち中耕や草取りをし、肥料も与えて、充分に肥料が少くて一株一株が充分に生長できぬようなどきには、特に種子のまき量を多くして、これを補うようにしなければなりません。

玉蜀黍やソルゴーのよう、草までの大きさ、サイレージ用の作物でも、サイロにつめずに青刈りそのまままで飼料として用いる場合には、厚播き、すなわち、玉蜀黍では

反当り一三・一五立、ソルゴーなら三・五五・五立すじ播きにしたほうが、茎が細く

て、家畜の食べることがなくて、工合

がよろしいが、サイロへつめてサイレージにする場合には、刈りどきもおそらくますから、株間一六・五種から三三種おき位の点播きにして茎を太く作ります。このようない点播きの方法は、サイレージ用作物の場合は、あるいはカブラのような根葉類の播き合の場合用いるだけで、ほかの飼料作物にはあまり点播きは用いられません。

次は土かけの注意ですが、播かれた種子が土の中から芽をだすときには、稲科のものは種子が土の中に残り、芽だけが土の上にでてきます。豆科のものは、種子がすなわち養分を貯えた双葉ですから、大ていの豆科の種類では、種子が地面にもうち上つて開きます。しかし中には豆科でも、豌豆、蚕豆、ベーチ類のように、双葉が地中に残つて、芽だけを土の上に出してくる種類もあります。

稻科のものや、豆科でも豌豆のように芽だけを地面に出す種類ならば、かなり深くまいても、芽を出すことができますが、双葉のもち上つてくる豆科の大部分の種類では、種子の上にあまり固い土を厚くかけると、これをおし上げる力がなく、腐つてしまふことがあります。ルーピン・大豆など、種子の大きいものほど、この心配が多いので、特に浅く播くよう気をつけなければなりません。また、種子の小さいものは、あまり深く播くと茎を伸ばして地面に出来るまでの養分をもつてない場合があるので、土かけを浅くしなければなりません。

せん。

牧草のなかまには、光があたらないと、芽の出にくい種類がありますので、一般に稻科の牧草類は浅播きにしたほうがよろし

いのです。

肥料、即ちこやしについては、一般に飼料作物は草のようなものだから、こやしはやらないでもできると考える人が多いよう

に思われます。なるほど、多くの飼料作物の根は、吸収力、即ち養水分を土から吸い上げる力が強くて、普通作物のあまりできないようなところでもかなりできます。し

かし、いくら根の養水分を吸い上げる力が強くても全く肥料分のない土からは何も吸いとることはできません。それで、反当り

三七〇匁、七四〇匁もの青草を刈りとるとのできる飼料作物には、やはりこれだけの茎葉を作るに十分なだけの肥料をやらないとそれが悪いのはあたります。や

りでよく出来たとすれば、肥料を吸いとられてあと地が非常にやせてしまうことに

なります。

このように充分に青刈り収量をあげれば、その中に吸いとられる肥料分は、実取り作物を作った場合よりもはるかに多いものですから、普通の実取り作物よりもむしろ野菜などにたくさんの肥料を与えるよう心がけなければなりません。

なお、豆科作物は窒素肥料を自分で作る力がありますから、窒素肥料だけはやらなければなりません。また、豆科では豆の二枚本葉が出るところ、また、稻科では三

枚の葉が出たところで、どちらも、種子の中

に貯えていた養分を使い果して、自分の力、自分の根で土の中から養分を吸い上げて生

活してゆかなければならなくなる——一度

赤ちゃんの乳離れの時期に相当する頃に、寒さの害をうけやすくなるものです。

播きどきが遅れると、丁度寒さのきびしい一月二月のころに、乳離れの時期を迎えることになりますから、枯れてしまうことになりやすいものです。

夏作物の播きどきは、冬作物ほど収量に影響しませんが、大豆や玉蜀黍は、昼間の時間の長い春の季節に育てますと、茎葉ばかりを茂らし、昼間の時間が短くなつてく

ると、花をつけ実を結ぶ性質をもつていまから、このような作物は霜の害をうけない限り、なるべく春早く三月中旬ばくろから

ら、春になつてからの生長も早く、収量も多くなります。

冬作物のうちでも、豆科のものは、おそらくとも一〇月いつぱいに播かないと出来が悪く、あまりおそくなると、冬の寒さのたまりに滅することもあります。麦類例ええば燕麦は一月半ばくろまで播き、更におそくなつても収量は少いが、全滅するようないいことがあります。それで、反当り三七〇匁、七四〇匁もの青草を刈りとるとのできる飼料作物には、やはりこれだけの茎葉を作るに十分なだけの肥料をやらないとそれが悪いのはあたります。やらないでよく出来たとすれば、肥料を吸いとられてあと地が非常にやせてしまうことに

なります。

クリムソンクロバー・赤クロバー・アルサ

イククローバーなどのクロバー類、また稻科のものでも、イタリアンライグラスなどは

一〇月中ばまでに播かないと収量が上ります

せん。

冬作物の寒さの害をうけやすい時期を調べてみると、豆科では双葉の間から一

枚本葉が出るところ、また、稻科では三

枚の葉が出たところで、どちらも、種子の中

に貯えていた養分を使い果して、自分の力、自分の根で土の中から養分を吸い上げて生

活してゆかなければならなくなる——一度

赤ちゃんの乳離れの時期に相当する頃に、寒さの害をうけやすくなるものです。

播きどきが遅れると、丁度寒さのきびしい一月二月のころに、乳離れの時期を迎えることになりますから、枯れてしまうことになります。それで、秋播き、それもありおそいと、小さいうちに冬の寒さを迎えることになりますから、九月ごろに播くのが一番よろしいです。

ただ多年生の草でも、夏茂る夏草でありますラブグラスとかメドハギなどは、春播きにするほうがよろしい。

青刈り作物の手入れは一般に、実取り作物ほど充分に行う必要はありません。すなわち中耕や草けずりはやるほうがよろしいません。従つて、同じ一反作つても、青刈り栽培ならば実取り作物を作るよりも、は

り栽培ながら実取り作物を作るよりも、は

うがよいわけです。ただ玉蜀黍は早播きするとズイムシの害をうけることが多いようですが、特に風のために倒れる心配があるから、特に風のために倒れる心配があるといふような場合のほかは、あまり行いません。従つて、同じ一反作つても、青刈り栽培ながら実取り作物を作るよりも、は

り栽培ながら実取り作物を作るよりも、は

るかに手間はかかりません。

(次号へ続く)